

▶昭和49年北総開所時の仲間が勢ぞろい。この大地に生きて40年。「働くこと生きること」の毎日を積み重ねて辿り着いた今日のこの日。(H26・4・1)



▲第70回保護者職員懇談会。園長を囲み、共に40年を支えてきたちはは、あにおとうと、あねいもうとたちが集う。(H26・4・29)

特 集
祝
北総育成園
創立40周年
(船橋市)

その源流は更に遡る1953(昭和29)のこと
1974(昭和49)開園→2014(平成26/1)満40周年。
この日を節目にこれから10年先2024年に向かって歩む。
この旅、果てしもない道のつくつくほうし

北 総 の 里

発行日 2014. 5. 16
第 227 号
(第1回発行)
1974年4月1日
発行所 北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが
新しくなりました!

施設の概要や理念、利用者の様子、
園長からのお知らせ等、盛りだくさん!
ぜひアクセスしてみてください。

ホームページアドレス
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp

北総育成園がここ、香取郡東庄町の丘の上、大利根が流れ、その先遙かに太平洋(鹿島灘)を俯瞰するこの場所に開園したのは昭和49(1974)年4月1日のこと。以来、40年の歳月が流れました。平成26(2014)年3月31日を以て丸40年。4月1日で40年と1日、4月2日で40年と2日。当初はその特別な瞬間が過ぎていくのがいとおしく数えられますが、この一日一日はこれから10年先の北総の歩みの一歩の始まりに他なりません。

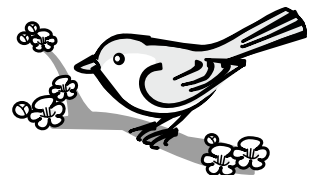
わが子が北総を利用することになった。保護者の皆さんはその切なさや胸に、影で北総を支える大きな力となり40年を重ねてくれました。40年は10年一昔の4昔。10年で人も自然も変わります。まして4昔となると幾つもの大きな山脈を越える話。北総の40年も嬉しいこと、悲しいこと、苦しいこ

と色々を語らねばなりません。

この人たちの「幸せ」を考えるのが私たちの仕事。では「幸せ」とはどんな状態を指すのか、これは「こうだ」という答えはありません。親の元を離れて初めての夜。就寝の布団の中に入つて天井を見上げながら、とおちゃんかあちゃん」と心細い涙を浮かべた日のこと。一カ月後、父ちゃん母ちゃんが外泊の迎えに来てくれた。家から離れても父ちゃん母ちゃんは俺のこと思ってくれている。心のパイプが繋がった。それを理解した時、この人たちはこの地に生きること心に置くようになりました。

そして、何より東庄香取地域の皆さんが温かくこの人たちのあるがままを見守ってくれたこと。遠くの親戚より近くの他人。地域の皆様の40年のご理解とご助力に心より御礼申し上げます。本当に長い歳月をありがとうございます。そして、どうかこれからもご理解とご助力のほどお願い致します。

(武井)



北総40周年に寄す

今年は、北総育成園創立40周年の記念すべき年です。北総の源流から支えてきた幹部職員、また在職年数が10年以上の主任職員に、「北総40周年に寄す」というテーマで原稿を募りましたので、ご紹介させて頂きます。



■園長補佐 城之内英夫

昭和49年当初は、本館以外の建物は、園庭の片隅に僅かな四坪ほどの倉庫がぼつんと建っており、そこを拠点に農耕班が活動、職員宿舍の周りを耕し畑作りをしていました。

そういう時代に北総育成園にお世話になりました。色々な経験をさせて頂きました。畑仕事を鍬やスコップの使い方から覚え、仕事が進むにつれて耕耘機やトラクターを使うようになり、環境整備では草刈り機を使うのは当たり前で、須賀山の整備ではウンボまで扱うようになりました。園芸班担当時には溶接機を購入、苦労して棚作りをしたことを想い出します。木工仕事では、小動物小屋や倉庫等必要に応じ何でも手作りして来しました。

施設職員は何でも屋。色々な経験ができたことは、私にとって北総で働くひとつの楽しみであったように

思います。昔はのんびりとしていた時代。作業が終わるとみんな一緒に風呂に入り、背中を流し合った時代から早40年。昔を懐かしみながらも先を見据えた仕事をしていければと思います。

■副園長 白樫 久子

北総に入職した昭和の時代。今は車いすで生活している阿部さんも太田さんも40代の働き盛り。毎朝皆で岡飯田のお地藏さんを曲がって坂を上り牛小屋の横を通って散歩した。畑の中の道に並ぶ。眩しい朝日を浴びての朝礼や体操は、今日も一生懸命仕事をするぞと皆の心が一つになる時間だった。松枝さんは野の花が好きでよく花を摘みながら歩いていた。「もうすぐ桜が咲くなあ」と今は亡き春子さんがつぶやいていた。私は木工班を始め5つの班で作業をした。売り上げを伸ばしたくて夜なべもした。無理もしたがその分手応えがあった。演劇クラブの稽古と舞台に夢中になった。恵久美さん田中さん福田さん、そして矢作さん。百回もの舞台は韓国ハワイ北欧にまで及んだ。今も客席の拍手と舞台の一人ひとりの誇らしげな笑顔が浮かんでくる。

40周年の今、建物が大きく生まれ

変わる。でも変わらない(変わってはいけない)多くのものが我々を支えてくれている。園長はそれを「源流」という。私はやとその意味の重さを感じている。40年目の桜を共に仰いだこの春はただの奇跡ではない。この人たちの尊い人生に携われていることは幸せである。

■支援課長 猪田 昌宏

私が北総に入職したのは平成10年ですから今年で16年、園長はじめ諸先輩方、保護者の方々、そして利用者の方々に育てていただき今日に至っています。

お恥ずかしい話、福祉についての専門性や知識もなかった私ですが、園長はじめ諸先輩方に「まずは利用者」と一生懸命汗を流して働くこと。」と教えられたことを思い出します。



▲作業を終え館内への帰り道。園坂の桜が「おかえり」と言うように迎えてくれる。(H26. 4. 1)

また学生あがりの私でしたので、いち社会人としての礼儀や姿勢をこの仕事を通して学んできました。沢山の行事の実行委員長や仕事をしてきましたが、やはり一番の土台となったのが「働くこと生きること」。紙工芸班を担当し、どんなに利用者の生産力が小さくても職員の努力で利用者の顔が立つ。その園長の思想があつて今の自分もあるのだと思います。

北総育成園新棟建設、既存棟大改修、そして40周年という大きな節目に立ち会えたことは幸せですし、歴史をこれからも伝えていくということは、今が本当に貴重な時間だと思います。

■支援課長 絵鳩 典子

私が北総にお世話になって今年で19年。40年という北総の歴史の約半分の年月になります。その年月はそのまま私の広報委員としての経験年数にもなります。北総1年目の年から広報委員として歴史ある「北総の里」の編集に携わったことは、とても貴重なこと。特に広報委員長になってからは、園長との編集会議の時間を多く持ち、単なる編集作業ではなく、文章を通して利用者の生き様や心に抱える思いに向き合うということを学びました。「北総の里」は施設の情報公開だけでなく、「働くこと生きること」「平和なくして

福祉なし」「自然・命・平和」という普遍的なメッセージを毎回発信しています。その為には攻めの姿勢も大切であり、毎回園長から「何を伝えたいのか」をしっかり意識することが大切だと教えられました。それは時にとでもしんどいことであり「もう書けない!」と思ったことも何度もあります。でも逃げずに諦めずに取り組むことで、いつしか「書く」ことは私の「力」になりました。お蔭様で広報紙を読んで下さった皆様から「おもしろかったよ」と言って頂けることもあり、広報委員会の大きな支えになっています。今年は40周年記念誌も発行予定であり、恩返しのつもりで精一杯取り組んでいきたいと思っています。

■支援課長 興 梶 孝

北総に入職し15年目の春を迎えた。15年という歳月の中で、日々利用者と共に仕事をしたり、外出や旅行に出かけ沢山の思い出を作ることが出来た。

北総の良い所、私自身が一番好きなことは四季を大切にすることだ。春の桜。咲けば散るのが定め。一期一会の景色を利用者と楽しむ。そんな桜の写真を撮ってコンテストを開催するのはきつと北総だけだと思う。夏は厳しい暑さとの闘い。大汗を流して作業を頑張り、実りの秋へと繋げていく。そんな中でのお楽

しみは土用の丑の日の鰻弁当。収穫の秋。銀杏や紅葉が色づく頃、北総の里も野菜、花、椎茸、干支人形と作業が一番活気づく季節。寒い冬。やがて来る春を待ちわびながら、次年度の準備に追われる。たまに降る慣れない雪に作業を中断して皆で雪かきをする。お正月は手作りのおせち料理で新年を迎えるのも北総の家庭的な雰囲気良く表れていると思う。これらの取り組みは園長が長年にわたり拘ってきたことであり、北総の財産である。その財産を守っていくことが我々の使命であると40年目の北総の里の桜を見て改めて思う。

■支援主任 高木 恭一

私が北総で働き始めたのは平成元年、現在改修工事中の既存棟が完成した年です。入所定員が50人から75人に増え、作業班も5班から7班に増えました。その後の15年ほどは、北総の高度経済成長期だったように思います。販売の売り上げはどんどん伸び、平成4年の韓国旅行を皮切りに、北欧、ハワイ、中国と海外旅行にこの人たちと一緒にいったのは最高の思い出です。居室活動でも競うように今までにない取り組みを考え、茨城県的那珂川での芋煮会や12月の一斉外出でのジブリの森美術館やマッスルミュージカルの見学なども、北総に勤めていなかったらきつと見ることはできなかっただろうと

思います。しかし、10年前くらいからは利用者の高齢化が顕著になり、作業、生活、余暇のどの場面でも活動が縮小されてきています。「昔のようなことが出来たらなー」と思うこともあります。若い頃のいろいろな思い出が今の私自身を支えているのと同じように、この人たちの今を支えているんだと思います。これからも共に歩んで行こうと思います。

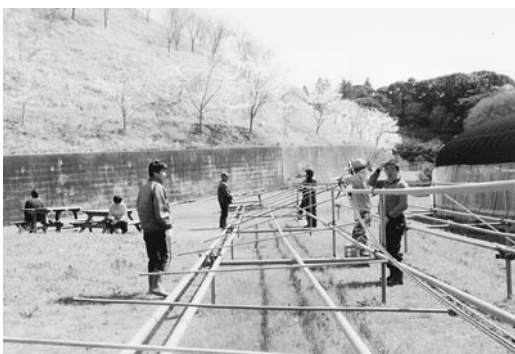
■支援主任 齊藤 到

私が北総育成園に入職したのは平成6年9月だったので、かれこれ20年近く経つこととなります。北総育成園が創立40周年ですので、北総の歴史の半分を一緒に過ごしてきたこととなります。北総にお世話になった頃には、先輩職員の努力により、生活や作業の仕組みはしっかりと出来上がっており、その仕組みがあったからこそ、やりがいのある仕事となっていたと思います。私は、北総に入った時から農耕班に所属し、美味しくて良い野菜を作ることを目標に利用者と一緒に頑張ってきました。色々な喜びや苦勞を利用者と一緒に経験しながらの20年だったと思います。昨年新棟が完成し、今年度既存棟の改修が完了すれば、暮らしやすい北総育成園に生まれ変わることであります。建物のハード面だけではなく、それをどう生かしていくかソフト面においても職員みんなで知恵

を出し合いながら、それにこれまでの経験を生かしながら、利用者の支援に携わっていきたいと思います。

■支援主任 青野 豊市

北総育成園に入職して、お世話になってから20年目を迎える。自分は今年で40歳となり、北総育成園の開所は昭和49年と一緒の生まれ年。入職してからずっと一方的な親近感を抱きながら仕事させて頂いている。20年前、何もわからず社会に出た自分をおおらかに見守って下さった先輩方はもちろんのこと、地域の方にも、ボランティア、行事等を通じて関わって頂き、色々なことを教えて頂いた。日々の利用者との仕事の中でも共に汗して達成した時の充実感、うまく行かなかった時、皆で考え取り組むこともとても楽しかった。20年という時は自分を大きく変えてく



▲農耕班では切り干し大根作りが終わり干し場の解体作業。見守るように咲く擁壁上の100本の桜が美しい。(H26. 4. 4)

れた。先輩方、地域の方、利用者はもちろんだが、保護者の関わりの中で、教えて頂く場面も多かった。限られた時間しかお会い出来ないが、自分の子どもに対する思いや考え方を率直に話してくれることにいつも感謝している。これからも自分が成長出来るように利用者と共に仕事をがんばりたいと思う。

■支援主任 保科 智子

私が北総で働き始めて15年が過ぎました。北総に入り、1年目は25周年ということで記念すべき年だったの思い出します。そして、25周年記念としてハワイ旅行へ一緒に行ったことが一番の思い出です。私自身、海外旅行は初めてで何も分からないまま参加していたと思いますが、利用者さん達は海外旅行経験者。私が初飛行機でドキドキしている隣で、諏訪正子さんがサングラスをかけて空を眺めていたり、秋山さんが情報紙を見てリラックスしている姿に「さすが、大人の人達だなあ。」と感じていました。ハワイ旅行、中国旅行と海外へ行った中では、言葉の壁を感じず、心であれあう利用者さんの姿にも驚きました。交流とは言葉だけの会話ではないことを学びました。

また、私は伝統ある北総芸座連にも関わらせて頂きました。現在は高齢となり演奏も踊りも衰えてしま

たが、どの公演、発表でも観ている方に感動と元気な力を与えられることは40年の継続があるからこそだと思います。以前のように活気ある姿ではありませんが、歴史ある芸座連の今と一緒に過ごし、誇りを持って利用者さんと歩んでいきたいと思っています。

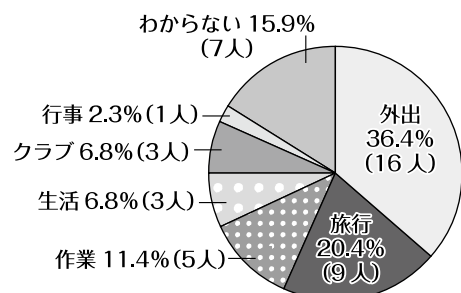
■支援主任 菅谷 大輔

私が入職したのは平成17年度であり、今年で10年目となる。その10年の中で見てきた桜はとても艶やかで儂いものに感じる。私が入職した頃は、まだ、木工、手芸班の作業棟があり、春になると素晴らしいソメイヨシノが見事に咲き誇り、作業棟を華やかに彩っていた光景がとても印象深く、今でも頭の中に鮮明に残っている。平成22年、その桜もバリアフリー新棟の建設に伴い、残念ながら姿を消すことに。「名残の桜まつり」を開催して、今まで精いっぱい咲いてくれた桜を皆で惜しむ。その時の桜は30年以上皆を見守ってきた偉大さを存分に見せ、誇らしさまで感じた。新棟が完成し、残された中庭には新しく4本の桜が植えられた。消えてしまう命もある。自然から「見る」「聞く」「学ぶ」ということを利用者と共に感じながら仕事ができる幸せを改めて胸に置き、これからは歩んでいきたい。

“アンケート”に見るこの人たちの40年

Q、北総育成園で暮らして今までで一番の思い出は何ですか？

このアンケートは北総育成園の利用者75名のうち有効回答？44名についてまとめたものです。



《このアンケートを通して》

今年、北総育成園創立40周年ということで、利用者の方にこれまで北総育成園で過ごす中で一番に思い出に残っていることは何かを質問し、利用者を通して北総の40年を振り返ってみました。実施に当たっては、予断を避け第一声の言葉を取り上げました。この人たちは「食べること、への印象が優先されて、今年の一泊外出のことが40年で一番になってしまいます。海外旅行は別格のように、そのことを言葉にする人が多かったです。そして、人数は少なくなりますが、作業、生活、クラブ、行事と回答がありました。作業に関しては、長年に渡り積み重ねてきたことであり、利用者にとっては「特別なこと。ではなく、日常的なこととして捉えているのではないかと感じました。一人ひとりの心にある思い出が、この人たちにとっての人生の財産になるのだと思います。高齢化が進む中、昔のような旅行も難しくなりましたが、これからも、日々の作業や生活を共にしていく中で、また新たな思い出を積み重ねていければと思います。」(金子)

《いろいろな意見》

- 外出** 「シャトーカミヤ！やきにく楽しかった！」(山本武さん)
「バーベキューでコーラいっぱいなんだ！」(村上千代子さん)
「じっしゅうのかえりにはいつもふのや(地元のお店)とかよくよってきたときがたのしかった。」(林松枝さん)
「神楽！祭りが良かった！」(堀越正明さん)
- 旅行** 「ハワイとかんこく、ちゅうごくいったよ。えんげきやったよ」(勝又恵久美さん)
「ハワイにひこうきのっていったね。きれいなふじさんみたね(ダイヤモンドヘッドのこと)。(安部百合子さん)
「ハワイ旅行行った！かよさんに車(いす)おしてもらった。」(阿部信一さん)
「かいがいりょうこう！かんこくいった。しまいていけいやった。」(浜崎誠さん)
- 作業** 「いちばんはさぎょうだね！カンナかけやった。」(山本泰三さん)
「みんなとさぎょう！じっしゅうがんばっていつてること！」(瀧波和衛さん)
- 生活** 「ラジおたいそうやった。ブレイルームのちょうれい！」(大河原一男さん)
「おいしいものいっぱいたべれるからたのしいねえ。」(藤代和枝さん)
- クラブ** 「サイクリングたのしかった！まきのきがくえんまでいった。」(天野照人さん)
「カラオケ！」(清水康雄さん)
- 行事** 「ずーっとまえ！ぼんおどり！」(田中芳雄さん)

沖縄の心②

揺れる基地移設問題2

(進まぬ普天間飛行場返還)

蒼生学園施設長 砂川 好彦

米軍の飛行訓練に「タッチアンドゴー」というのがあります。飛行場を離陸した戦闘機が旋回して着陸し、またすぐに離陸するその繰り返しを2時間超行います。1機の場合もあります。が数機の場合もあります。その離発着経路は、防衛施設庁発表とは異なり、住宅地上空に大きくはみ出し飛行しています。離発着経路の住宅地域では100dB近い騒音が年間2万回測定されています。これは地下鉄がホームを通過する音とほぼ同じ大きさです。私も基地の近くに約5年住んでいました。1週間に1回、毎週水曜日に昼間と夜間に1回ずつ普天間飛行場の全機のエンジン調整が行われました。防音工事で騒音は小さくなりますが、地響きは変わりません。それが午前9時から午後11時頃まで続きます。

以前私が、商品の配達で行った北部の金武町からの帰り、いきなり「ドドドーン」と大きな音が後方から聞こえました。思わずバックミラーを見ますと、車は一台も見えません。気付くと前方も対向車線にも車は見えませんでした。

した。それでも大きな爆発音は続いています。大変なことが起こっていると思ったとき、その日の朝刊「今日、米軍実弾演習」の記事が頭に浮かびました。その瞬間、心配から「今にも当たるのでは」という恐怖に変わりました。「なあんだ演習か」とはなりません。爆発音が遠のき聞こえなくなるまで恐怖が続いたことを今でも覚えています。実弾演習は今もありますが、私が遭遇した県道を封鎖しての大規模な演習は現在ありません。(道路封鎖は、前日夜間から行われますので封鎖された道路を走っていたわけではありません。住民がその時間外出を控えたと思います。)

普天間飛行場の年間2万回に近い騒音と、墜落するかもしれないという恐怖を抱えたままの生活は常識で考える市民生活とは思えません。実際に2004年8月13日、沖縄国際大学に米軍ヘリが墜落しています。この騒音

は蒼生学園の私の部屋でも聞こえました。普天間飛行場の日本人従業員は197名で基地依存の経済ではないと思います。

1996年4月12日、橋本総理・モンデール共同記者会見で「普天間飛行場は、今後5年ないし7年以内に完全返還する」と発表しましたが、その年の12月「十分な代替施設が完成し運用可能になった後返還する」に変わりました。返還発表から18年が過ぎましたが、何も変わらないどころか、2012年オスプレイが配備され現在も24機が普天間飛行場に配備されています。宜野湾市面積の約25%を占める(東京ドーム100個分)普天間飛行場は、戦後68年余りも市の中央に存在し(写真参照)市民生活に大きな障害をもたらし、隣接する住宅地に危険を及ぼしています。返還合意の原点は危険性の除去であったと思います。私も早急な返還、閉鎖を望む一人です。



▲上空から見た普天間飛行場。宜野湾市のほぼ中央に位置し、周囲を取り囲むように住宅地。(写真・資料提供：宜野湾市基地政策部)

村議会だより 113

昨年度9月から始まった新棟での生活も半年が経ち、利用者、職員もだいぶ新しい生活に慣れてきた。しかしその反面、我々職員が色々なことに無頓着になってしまっていないかと反省することも多い。例えば館内掃除のこと。使用開始直後はちよつとした汚れにも敏感に反応し、すぐ掃除する姿勢があったのだが、段々とその姿勢も崩れ「あとでやろう」「誰かがやってくれるかな」と後回し、人任せになってしまっている現状がある。そんな職員の心構えは実際の掃除だけでなく、利用者への支援にも表れる。どんなに障害が重い利用者でもその状態に職員が慣れてしまえば、その人が抱える難儀に気づくことは出来ない。「今日も同じだ」と職員がその人に心を寄せなくなつた時、物言えぬこの人たちはどんなに辛いことだろうか。

5月15日の第42期村議会選挙を見据えていつも以上に作業や掃除に張り切って取り組んでくれる利用者の姿がある。「おつかれさま」「きれいになって助かるよ」と職員の具体的な心は拠り所を見つけ、うんと強くなる。新年度となり、新職員も3名加わった。改めて利用者一人ひとりに目と心を寄せていくことをしっかりと心掛けていきたい。

(菅谷)

街道をゆく

125

雑木林は豊だ。

(多民族・多宗教国マレーシア・ボルネオ) 印象記

武井 敏朗

4月、マレーシア(ボルネオ)の地を踏む機会があった。

17日夜8時コタ・キナバル空港着。外はむっとする熱帯夜。満天の星空の下に椰子の太木。コタ・キナバル市は人口約20万。主たる産業は何だろう。4泊したが、その辺りがよく分からなかった。コタ・キナバル市の名前の由来はボルネオ島最高峰、キナバル山(4095m)である。

2日目午前10時、市郊外の障害者施設(Sabah Cheshire Home)を見学。かなり広い敷地。入所部門、通所部門、休憩室、管理棟等の平屋がコンクリート廊下でつながっている。庭には実を付けた椰子、マンゴー等の熱帯植物。事務室奥の会議室に通された。この日4月18日(金)はマレーシアの特別祭日。従って施設も休日日課。建物群の一面にオープン広場が見える。そこに利用者20人程がいて来客である私たちに視線を合わせている。コンピュータ事務室の奥に会議室。女性施設長のジェニファーさんはマレー人か? 優しい

丸顔の40才位。事業運営は国から40%。他は寄付と独自の努力で賄っているとのこと。現地通訳のテリーさんは小柄で濃い眉毛のマレー人? 日本で日本語を2年勉強。その後の観光地案内は上手であったが、福祉の専門用語は苦手。訳の中身は何かちんぷんかんぷん。施設案内の最後に先程の利用者の皆さんと10分程の交流時間が持てた。殆どが重度の知的障害者であった。上記したように今日は祭日で休日日課。日本の私たちの施設も一緒に祭日は職員体制も薄く、ゆつくり過ごすという集団管理の日になりがち。付けっ放しのTVの前の20人は、突然の9名の来訪者に嬉しそう。が、全員そうではない。恥ずかしがり屋、関係なく喧嘩している人、黙々とにんにくの皮むきをしているおばさん二人。こ



▲ SABAH-HOME 見学。多民族国である。日本人らしい顔が2~3人混じっている。(H26. 4.18 AM11:00)

の国は多民族・多宗教国家。マレーシア系50%。中国系30%。韓国その他系20%。一行9人が「フロムジャパン」等と気取ってもこの人たちには何の関係もない。人は人。その中に恥ずかしそう淋しそうに皆の後から私たちに視線を送っている細面美人さんがいた。帰りざわ、筆者はその彼女に日本から持参した熊のぬいぐるみのキーホルダーをそつと手に持たせた。彼女は一瞬びっくりしながら、慌てて、その縫いぐるみを手の中に隠した。そして「……」

キナバル山に向かう。熱帯ジャングルの中をどんどん高度を上げる。やがて視界が開け、周りの山壁に孤立して見える集落。丁度、四国山中、祖谷の里のような風景。この国は多民族・多宗教国家。マレーシア系中国系の他に独自の文化と言語を持つ部族が20以上存在する。キナバル山中のカダザン・ドゥスン族は自分たちをキナバル山の守護者と考える。その山壁に田を作り、畑を耕す。平地の町に暮らす人々はわざわざ、2時間以上掛けて山奥に野菜や米を仕入れに来ること。キナバル山を一望できる高所に市場。お土産物屋はキナバル山目当ての多国籍の観光客でごった返していた。

ボルネオ滞在の期間中、感心したこと。それは子どもの売り子が皆無

であったこと。そして町も観光地も山もどこも綺麗でゴミが落ちていなかったこと。

ガイドのテリーさんのバスの中での話。この国ではキリスト教は山に住む、回教は海、中華は街に住む。多宗教・多民族国家であるこの国は英知を結集して、お互いがお互いの顔を立て、立つ瀬を残し、折り合いを付ける。相互共存の文化を醸成した。

日本に帰った。当園の周りには雑木林である。今、新緑の真つ盛りである。檜・栗・つつじ、松、杉、桜。混在した林の新芽が自己主張。その新緑の中に身を任せる幸せ。3月浦和レッズ応援団が、ジャパンオンリーで物議を醸した。垣間見たボルネオ。多民族多宗教国家は豊かであった。それは何だか目の前の雑木林の豊かさ、と重なった:



▲ 多宗教、多民族が楽しく暮らす国。左からイスラム(マレーシア)、中華、カンボジア、モーコ。(H26. 4.19 PM2:00)

北総俳壇

席席席作
一二三佳

◎ ○ ○ △

◎菜の花にごめんなさいと ロータリー

加瀬 裕一

○山仕事疲れふと見る 桜吹雪

杉本 和彦

・頑張ってねと勇気をもらった朝のひととき

鈴木 美佳

・風に舞い桜の花びら手の中に

大中 君江

・「わーきれい」桜見上げる仲間たち

興梠 孝

★前歩くあなたの肩に花びらが

林 直子

・園坂の桜見れば思い出すいつの日の名残の桜祭りかな

金子 晴奈

△桜咲く野の道を病院に通う今の幸せ

師岡小百合

・桜日和みんなで散歩ばかばかり

神 志帆

・桜散り桜のじゅうたん出来上がり

篠塚奈緒美

◎ゆりこさんあざみ窓から桜見る

藤原 加奈

△神楽よりからあげコーラチョコバナナ

安藤 悠果

○夜勤明け八重の桜がお見送り

絵鳩 典子

△桜見ずどんどん歩く武さん

内田 沙和

・桜山須賀山城へ続く道

猪田 昌宏

○野の花が雑草に見えてきたさあ草刈りだ

高木 恭一

・春日とお花見よりも綿毛飛ばし(林産班で綿毛飛ばしをしている平塚さん)

加茂 聖也

△ホウレン草ネギより高く伸びている

三浦 圭織

選者寸評

この4月1日で満40周年を迎えた当園。園を囲むように植えられた100以上の染井吉野がその日を祝うかのように満開であった。職員に「記念すべきこの日を書き留めよ」と檄を飛ばす。①「桜下、この人たちの今を写し取った写真コンテスト」②「桜下、この人たちのありのままを活写した俳句コンテスト」である。応募多数であったが写真コンテストは平凡な中身。この広報に載せる出来は無し。俳句ももう一頑張りであった。しかし、「この人たちを言葉にする、もっと発見する」。そのことにもがき苦しんでいることが伝わってくる句が多くあった。そのことでは次を大いに期待したい。林さんを一席とした。「虎風山人」

みんなの広場

①新たな一歩

桜の季節を迎え、この北総の地で新たな一歩を踏み出した春。不安な気持ちと一緒に坂を歩いていく途中、利用者さんとすれ違ふと笑顔で挨拶をしてくれたり、ほほえんでくれたり、そんな利用者さんとのやりとりで少し気持ちが落ち着いたのを覚えています。これから利用者さんと共に過ごしながら、利用者さんの生き様をしっかりと目に焼き付けて、共に成長していけたらなと感じた一歩となりました。

②二年目の春

(事務員・鈴木)

昨年、新職員として働き始めた今頃、自分は何を思い考えながら仕事をしていたのだろうかと思ひだしてみた。大学を卒業し、毎日のように会っていた友人とも離れ帰ってきた地元。新しい環境への不安と期待でいっぱいだった。とにかく精一杯頑張ろう、そう思いながら始まった日々の中で経験したことはこれから忘れずにいたい。

③桜

(林)

平成26年度がスタートし、新しい居室運営、作業が始まる。新職員が入り、気持ち引き締まる思いだ。4月初めには園周りの桜が満開

に。2年前とはまた違う新棟から見る桜の景色。四季を知らせてくれる桜。作業の行き帰りも桜を見ることが出来、この季節は花見をしながらの作業移動、とても楽しみだ。「わぁキレイ」とKさん。「すっごいなー」とAさん。皆桜を楽しみにしている。園庭のナナコとハナコも桜吹雪に跳ねて喜んでいいる。心まで春にしてくれるのが桜だ。

④利用者と共に

(篠塚)

園坂の枝垂桜が咲き始める頃、新年度が始まる。指を折りつつ25年の歳月をかぞえてきました。私が入った時は、椎の木寮の増築中で、園庭にプレハブがあったことを思い出します。毎日作業や生活を利用者さんと共に行うことで楽しく過ごし、元気に働くことができたように思います。一年を通して、様々な行事も行われ、今はない運動会や親子旅行、盆踊り等も一緒に楽しんできました。全員で行った韓国、ハワイも北総育成園にいたからこそでした。私はこの仕事で自分にとって良かったと思います。純粹な利用者さんと共に過ごすことで自分がどんなに元気になったことでしょうか。主人を亡くし辛い時も、仕事があったからこそ元気になりました。とても感謝しております。新棟が落成され、利用者さんの喜ぶ顔を見、自分のことのように嬉しく思います。

(岡澤)

学び合い志を高め合う機会を得ています。3・11の東日本大震災の際には利峰先生自ら北総を訪ねて下さり、少なからず被害にあった我々を労り励まして下さいました。この度頂きました版画は姉妹の固い絆を象徴するものであり、大切に展示させて頂きます。誠にありがとうございました。(絵鳩)



4.29 保護者職員懇談会で、普賢学園から送られた木版画を紹介

木版画「大地の息吹」小崎侃作

作者は長崎を拠点に活動。原爆句、長崎叙情詩、山頭火句に寄るその作品は見る者の心を打つ。「大地の息吹」と題するこの作品も普賢岳噴火の有り様を余すことなく今に伝える大作である。

太田川のほとり 123



この度、北総育成園40周年のお祝いに姉妹施設である長崎県の普賢学園、本田利峰先生より、立派な版画を頂戴しました。版画には噴火する雲仙普賢岳、その麓には島原城と普賢学園が描かれています。とても迫力があり、観る人の心に訴えかけます。利峰先生が北総の為にと版画家の方に依頼し作って下さった世界に一つの貴重な作品。普賢学園と北総の繋がりの源流は利峰先生と武井園長のアメリカ研修での出会いから始まります。お互いの施設の話をする中で帰国後も交流を図ろうと意気投合。そんな矢先の平成3年、雲仙普賢岳が噴火し、普賢学園の皆さんも被災されました。仮施設での避難生活の中「大変な時こそ手を取り合おう」と姉妹提携が結ばれました。以来23年。頻繁な行き来はできませんが、年に一度はお互いの施設を訪問し、

野の花広場・須賀山城址祭り開催!!

昨年度から園長の指揮のもと、一年に渡って行われてきた須賀山城址公園化事業。本丸テラスを中心に整備が進み、皆様にお披露目できる事となりました。またそれと並行して笹川なずな工房隣地に備蓄倉庫、炊き出し小屋を建設。その一帯に季節の花々を植え「野の花広場」として整えました。福祉・歴史・自然が一体となったこの地に地域の皆様をお招きし、北総育成園創立40周年事業の一つとして盛大に「野の花広場・須賀山城址祭り」を開催致します!

(日 時) 平成 26 年 5 月 24 日 (土) 11:00 ~ 15:00

(会 場) 須賀山城址跡本丸テラス及び野の花広場

(催し物) 北総芸座連による芸座演奏

地域ゲストによる公演

大木戸芸座連による芸座演奏

北総どっこい一座による演劇



(模擬店・販売)

カレー・モツ煮・焼きそば・フランクフルト・

ポップコーン・ジュース・ビール(北総)

パン・ジャム他販売(笹川なずな工房)

みたらし団子他販売(やまだ自然)

その他、北総育成園各作業班の製品販売・

恩花売店での販売等多数あり!

皆様のご来場を
心よりお待ちしております!!

編集後記

春になると、新しい何かを始めたくくなります。寒い冬が終わり、冬眠していた動物や土の中で眠っていた虫たちが動き始め、暖かい日差しを待ちわびていた木々が芽吹き始める。そんな、始まりの季節。だからなのでしょう。今年も北総の桜が満開になりました。すでに青々とした葉が生い茂っておりすが、改めて桜の季節は尊いものと感じます。新入生や新社会人はもちろん、どの人にとってもスタートの季節。尊い季節だからこそしっかりとけじめをつけて、気持ちも新たに、いろんなことにまだまだ挑戦したい!そんな気持ちです。

さて、北総創立40周年という記念すべき年の最初の広報紙の編集に携わらせて頂くこととなり、身が引き締まる思いです。今回は、幹部職員から原稿を募ると同時に、利用者の皆さんからも40年を振り返っての思い出を聞く機会がありました。改めて聞いてみないと知ることのできない一人ひとりの世界に触れることができ、大変貴重な経験をしたように思います。今号も隅から隅まで気持ちのこもった広報紙となっておりますので、是非皆さん、手に取って読んで頂けたら幸いです。

(金子)